

土器と磚・瓦の話

はじめに 飛鳥時代の遺跡に限らず、遺跡や遺構の年代を決めるのはたやすいことではない。それはわかっているのだが、横目で『日本書紀』などの史料をちらちらみながら、この時代を考えるのが歴史考古学の立場とすると、どうしても細かい年代を決めたくなる。近年は、年輪年代法によって、法隆寺西院伽藍の塔心柱の伐採年が594年（推古2年）とわかったり、平城元興寺禅室に使われていた巻斗が582年（敏達11年）伐採の材を使っていることが判明したりと、めざましい成果があがっている（光谷拓実『年輪年代法と文化財』日本の美術No.421、2001）。めざましすぎて困ってしまい、法隆寺の塔は最初瓦が葺いてなかったのではないか、といった意見まで出る始末。それは措くとしても、年輪年代法の恩恵に恵まれるのはめったにないことだ。

となれば、やはり土器と瓦、時々木簡に頼りながら年代を考えていくしか方法はない。ところが、このごろこの土器と瓦（土器の研究者と瓦の研究者）が、「水と油」とまではいわないにしても、しっくりしない。同じ遺跡の年代をめぐり、扱う遺物によって20年や30年の違いが出ることも珍しくない。たとえば、摂津四天王寺の創建年代について。最近、土器の研究者の中では7世紀の第2四半期とする意見が強い。厩戸王子（聖徳太子）の没年は622年（推古30年）。信仰に篤い瓦の研究者には、太子没後の四天王寺創建説など、くわばらくわばら以外の何者でもない（網伸也「古代寺院の創建と瓦陶兼業窯—四天王寺の創建年代を中心にして—」『あまのとしび』2000）。

しかし、これは宗教的な紛争でもないわけで、性善説にたち、遺構から出土した遺物をきっちり分析する作業を積み重ねていけば、いつかは妥協の途がみいだせるだろう。そこで、今回は、同じ遺構から出土した土器と磚・瓦を分析し、どのような型式の土器と瓦が共存しているのかを考えてみたい。対象としては、飛鳥の川原寺で発掘された1条の溝、その昔「斜行溝SD02」とよばれ、最近「SD367」と名付けられた溝の資料を扱う。出土した土器については、『藤原概報10』と『年報1997-II』に詳しい解説があるので、これらを参照していただきたい。

出土遺構の概要 溝SD367は、断面U字形をした幅1.7～3.0m、深さ0.9～1.4mの素掘溝。1996年調査区では、溝の堆積層が3層にわかれ、上・中層は溝を埋め立てた土層（褐色土・暗褐色土）、下層は砂と粘土が互層になった堆積土層（灰色砂）だった。1979年調査区でも溝の堆積は3層あったが、すべてが1996年調査区での下層（灰色砂）に対応する。

出土土器の概要 SD367下層（1979年資料を含む）出土土器は、土師器の杯C・G・H、高杯C・H、鉢、甕、須恵器の杯G・H、平瓶、はそう、高杯、提瓶、甕や製塩土器がある。これらは、飛鳥Ⅰの特徴を備える。中層から出土した土器は、土師器の杯C・G・H・X、皿A、鉢H、高杯C、竈、ロクロ土師器脚付碗、須恵器の杯G・H、壺蓋、蓋、高杯、器台、甕などがあり、飛鳥池遺跡の灰緑色粘砂層の土器群と類似する。また、上層出土土器は飛鳥Ⅰのほかに、飛鳥Ⅱや飛鳥Ⅳの土器が少なからず含まれている（『年報1997-II』68～71頁）。

出土瓦の概要 1997年調査のSD367各層からは、少量ながら瓦磚が出土した（図47）。上層の褐色土からは、軒丸瓦3点（川原寺創建軒丸瓦601型式C種・E種・種不明各1点）と軒平瓦2点（四重弧紋の651型式）、面戸瓦・熨斗瓦各1点、丸瓦39点4.7kgと平瓦99点10.7kgが出土した。中層の暗褐色土からは、軒丸瓦1点（601型式C種）のほか、丸瓦1点0.1kgと平瓦3点0.8kg、そして磚2点が出土した。下層の灰色砂からは磚が1点出土したのみだった。つまり、下層には瓦が共存せず、中層にごく少量の瓦、上層にはやや多量の瓦が包含されている。1979年調査のときには瓦が出土しなかった。

上層から出土した丸瓦の大半は玉縁式のもので、凸面をヨコナデし、凹面は布目をミガキで調整する。平瓦はタテ縄叩き目を丁寧にヨコナデですりけし、凹面もタテ方向に調整して布目を消し去ったものが大多数。凸面布目平瓦もあるが、数はごく少ない。これらが川原寺創建時の瓦。側面に打ち欠きをおこなった平瓦もある。このほか、行基式丸瓦や側面に分割破面を残すか、破面だけをヘラケズリした7世紀前半の平瓦が少量ある。

中層出土平瓦は、川原寺創建平瓦が1点と、側面に分割破面を残した7世紀前半のものが2点ある。後者のうち、平瓦1点は上層の資料と接合する。丸瓦はおそらく7世紀前半のものだろう。

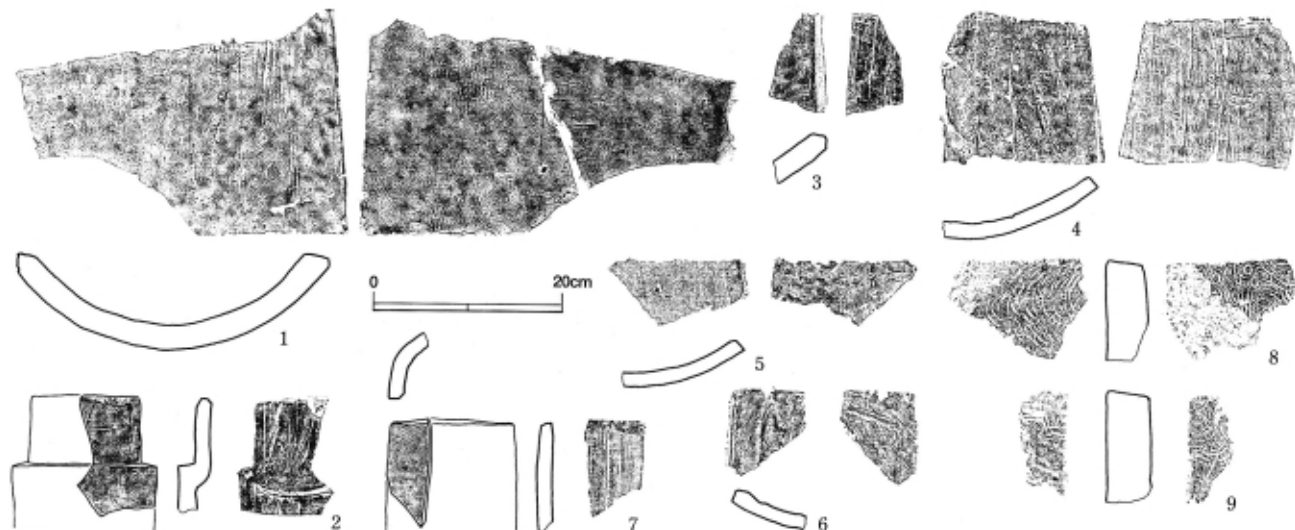


図47 川原寺SD367出土瓦磚 (1~3 川原寺創建瓦、4~7 川原寺以前の瓦、8・9 磚)

土器と瓦の関係 かつて飛鳥Ⅰの標式資料とされた古宮遺跡（小墾田宮推定地）石組溝SD050上層出土土器と、飛鳥Ⅱの標式資料坂田寺池SG100出土土器との間を埋める資料として、川原寺溝SD367下層出土土器のほか、甘樫丘東麓遺跡焼土層SX037（『藤原概報25』）と飛鳥池下層灰緑色粘砂層（『藤原概報22』）から出土した土器群があって、この順に型式学的な変遷が想定されている。さらに、山田寺跡下層の土器（『藤原概報20』）は、甘樫丘東麓遺跡焼土層SX037と飛鳥池下層灰緑色粘砂層とにまたがる内容だと評価されている（川越俊一「藤原京条坊年代考」『研究論集XI』2000）。

川原寺溝SD367下層の土器は、山田寺跡下層出土土器よりも古いとされるので、ここに川原寺創建瓦が含まれないことは当然だ。これより一段階新しい内容をもつSD367中層には、1点ずつだが川原寺創建軒丸瓦と平瓦が含まれていた。これらをもって飛鳥Ⅰの下限が川原寺創建までくだる、と断ずることも可能ではあるが、となると、飛鳥Ⅱ・Ⅲの年代との違いがわずかとなったり、いろいろと問題が生じてくる。調査は部分的だったので、SD367中層に川原寺創建瓦が含まれるかどうかは、今後の調査で再度検証するのがよいように思う。SD367上層では、比較的多量の川原寺創建瓦が、飛鳥Ⅱや飛鳥Ⅳの土器をともなって出土した。飛鳥Ⅲの時期は大津宮の時期（667～672）とされるから、その前後の土器が川原寺の創建期に対応することになる。これは、川原寺の創建を大津宮遷居以前の天智称制段階と考える福山敏男説（『奈良朝寺院の研究』1948）にうまく合致する。

川原寺がいつ完成したかの記録はない。だが、673年の一切経書写（『紀』天武2年3月是月条）はある程度の施設の完成を必要としただろうし、685年の行幸（『紀』天武14年8月丙戌（13日）条）は、前日の浄土寺（山田寺）行幸が山田寺完成を祝うものだったとすれば（この年講堂丈六仏開眼、『上宮聖徳法王帝説』裏書）、同様の行事だ

った可能性はあろう。

1996年の別の調査では、川原寺回廊西方の整地土の下、風化した岩盤の直上から飛鳥Ⅳの土師器杯Bが出土した（『年報1996-Ⅱ』）。飛鳥Ⅳは680年代を中心とし、一部670年代に遡る年代が想定されている。これは川原寺の造営期と重複するのだ。

下層の磚 SD367下層からは、特殊な磚が出土した。表裏に同心円紋の当具痕を残す長方形磚だ。同種の磚は上層からも1点出土した。出土層位からもわかるように、この磚は川原寺創建以前のもので、川原寺創建期の磚とはまったく違う。近在の橘寺にも、飛鳥寺にも類例がない。ところが、同様の手法で作られた磚が河内にある。鍋島隆宏氏は、この磚を「南河内型同心円文磚」として詳しく紹介した。出土遺跡は、細井廃寺や仏陀寺古墳、南坪池古墳など、伝承をふくめると10遺跡にわたる（鍋島隆宏「仏陀寺古墳出土の磚について」『太子町立竹内街道歴史資料館館報』第6号、2000）。なぜ南河内に特有の磚が川原寺下層から出土するのか断案はまだないが、川原寺下層遺跡が斉明の川原宮に関連するとすると、南河内での使用例が7世紀中ごろ前後とされているので、時期的にはほぼ近くなる。

余 談 唐の太宗は634年（貞観8年）、母・穆皇后追福のため、長安修徳坊に寺を建立し、弘福寺と号した。川原寺も、天智が母・斉明の追善のため、殯のおこなわれた川原宮に建立したとされ（福山敏男前掲書）、弟の天武もまた十三回忌に封五百戸をおくった（『新抄格勅符抄』）。川原寺も飛鳥浄御原宮の西にあるから、寺号・弘福寺は唐のそれにならったとみてよからう。なお、唐の弘福寺はのちに興福寺と号を改める（神龍元年・705）。川原寺が平城京に移転しなかった理由は、斉明追善の寺たるその性格に求められるが、平城京興福寺の伽藍が多少川原寺に似ているのを見ると、両者の寺号の類似も意図的なものだったと疑いたくなるのだが。（花谷 浩）